

生活再建に世界の善意

東日本大震災2年 日本赤十字社の復興支援事業

未曾有の被害に見舞われた東日本大震災から2年。被災者の生活再建などに海外救援金が役立っているのをご存じだろうか。海外の赤十字社や赤新月社などを通じて世界から日本赤十字社に寄せられた善意のお金で、現在約997億円にも上っている。被災者に直接届けられる国内の義援金に対し、海外救援金は生活や医療、教育などの基盤づくりに使われるのが特徴だ。これを財源として日本赤十字社が展開しているさまざまな復興支援事業をまとめた。

被災者に寄り添う

ハード、ソフト両面で

復興支援事業はやはり生活再建支援が中心だ。いち早く仮設住宅の入居者らに洗濯機などの家電6点セットを寄贈して喜ばれたのは記憶に新しい。冬場対策で断熱シートなども配られている。

たほか、各地で仮設診療所や急患センターなどの整備、病院の改修に取り組んでいる。

こうしたいわばハード面での支援に加え、仮設住宅や東京電力福島第1原発事故での避難生活が長期化するのに対応して、健康教室や新たなコミュニケーションづくりなどソフト面での支援にも力を入れる。健康教室では血圧測定や体操などのほか、健康相談や被災者の話を傾聴する「こころのケア」を実施。ウォーキング支援なども含め、孤立しがちな入居者の支えになっていると評価も高い。

海外救援金による復興支援事業(2013年1月現在)

生活再建支援 294億円	福祉サービス支援 19億円	教育支援 30億円
・仮設住宅や集会所の備品整備 ・仮設入居者への生活家電セットの寄贈 ・こころのケアや健康教室など	・福祉車両の整備 ・介護ベッドの寄贈 ・高齢者共同住宅の建設など	・仮設体育館の建設 ・学校給食のための設備 ・屋内遊び場やサマーキャンプなど
医療支援 151億円	原発事故対応 23億円	被災3県実施事業への資金支援 400億円
・各地の急患センターや仮設病院、仮設診療所などの整備 ・肺炎球菌ワクチンの無料接種	・放射能内部被ばく測定器の整備 ・食品放射能測定装置の寄贈など	・クウェートからの原油無償提供による資金が財源
災害対応能力の強化 35億円	その他	
・救護用テントやドクターカー、災害対策車両 ・衛星携帯電話など通信インフラ整備など	・緊急支援や管理費など	

101の国や地域から 約997億円

安心してできる施設へ

ルポ① 南三陸町の公立診療所

5階建ての4階天井まで津波が押し寄せ、患者や看護師ら計74人が亡くなった宮城県南三陸町の公立津川病院。助かった医師らが、震災1カ月後にはイスラエルの医療支援チームが使ったプレハブ6棟を譲り受け、診療を再開した。しかし、プレハブには水道がなく、トイレも応急。手狭で冷房もなく、患者にもスタッフにもつらい日が続いた。「設備を拡充できないか」と悩んでいたとき、日本赤十字社の海外救援金が医療施設支援に使われることを知った。「県の基金は震災前に使途を決めていた事業との調整で時間がかかると言われたが、日赤は即決。スピード感が全然違った」と横山



設備も整い患者も安心な公立南三陸診療所

楢葉の子 集い育む拠点

ルポ② いわき市の仮設こども園



にこやかな表情で給食を食べる園児ら

東京電力福島第1原発事故で福島県楢葉町からの避難者が全町民の約75%に当たる約5700人と最も多い同県いわき市。役場機能が移った中で、町立「あおぞらこども園」も市郊外の「いわき明星大学」の敷地に開園した。仮設だが、毎日園児のにぎやかな声に包まれている。

こども園は2012年8月に工事が始まり、12月に完成した。子育て支援センターも併設され、全部で5部屋。0〜5歳の園児22人が学ぶ。楢葉町時代の247人に比べ約10分の1に減った。

園舎建設にかかった費用約4300万円と椅子や机、厨房(ちゅうぼう)施設といった備品購入費の計約5220万円が海外救援金で賄われた。園児の受け入れも早く、4月には12人の新園児を迎えます。阿部園長は「こども園で育った園児が将来、楢葉町の復興に大きな役割を果たすことを期待している。」